

# 序章

## だれもが暮らしやすく豊かなくまもとの実現をめざして

この章のポイント：

- ・ はじめに
- ・ このガイドラインの性格
- ・ 身近な建物のユニバーサルデザイン
- ・ ユニバーサルデザイン(UD)の基本的な考え方

### 1 はじめに

本県では、全国に比べ、高齢化が進んでおり、本格的な少子高齢社会を迎えています。

また、人々の価値観やライフスタイルの多様化に伴って、子育てをしながら社会活動に参加する人が更に増えていくことが予想されます。

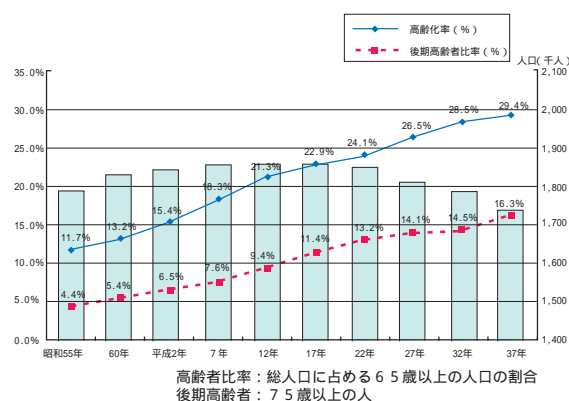
4人に1人が高齢者という社会では、建物の利用者の多くが高齢者ということも考えられるため、年齢とともに低下する身体機能を感じさせない配慮や介護のしやすさに配慮した建物づくりが必要となってきます。

また、乳幼児や小さな子どもと一緒に安心して使える建物が求められるとともに、男女共同参画社会を形成していくうえでは、男性でも乳幼児や介護を必要とする人と一緒に行動する場合の配慮が必要となってきます。

ノーマライゼーション(normalization)の実現に向けて、障害のある人もこれまで以上に社会活動に参加しやすい建物づくりが求められます。

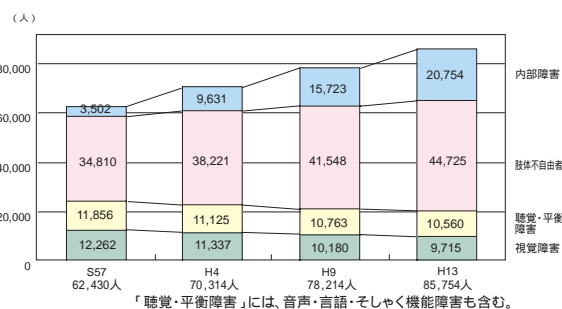
多数の人が利用する建物は、高齢や障害のため体の自由のきかない人、大きな荷物を持った人、妊婦さん、乳幼児と一緒にの人など様々な人の利用が想定されます。多くの人が安心して社会活動に参加でき、自らの力で毎日の生活を送ることができるよう、UDによるまちづくりが求められています。

1 ノーマライゼーションとは、年齢や障害のあるなしにかかわらず、すべての人が同じ社会の一員として、共に暮らしていけるような社会こそ当たり前の社会であるという考え方です。

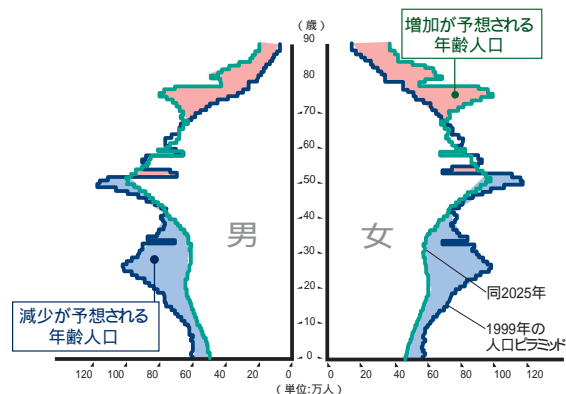


熊本県における高年齢化率及び人口の年次推移  
将来推計値は、国社会保険・人口問題研究所推計値 H9 を使用

部位別身障手帳交付者数  
(各年3月31日現在)



熊本県における身障手帳交付者数の年次推移



人口ピラミッドの推移と建物利用者像の変化(全国)

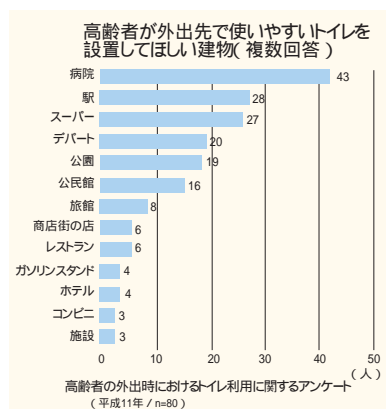
## トイレに関する多様な利用者ニーズ

高齢者、障害のある人、小さな子どもと一緒にの人などにとって、外出先での使いやすいトイレの有無は、外出そのものを左右する問題といえます。外出先のトイレのニーズについて、次のような調査例があります。

## 高齢者とトイレ

高齢者の外出に対する意識を「高齢者の日常生活に関する意識調査(平成11年総務庁調査)」でみると、外出に前向きな人が大多数。調査では8割を占めています。

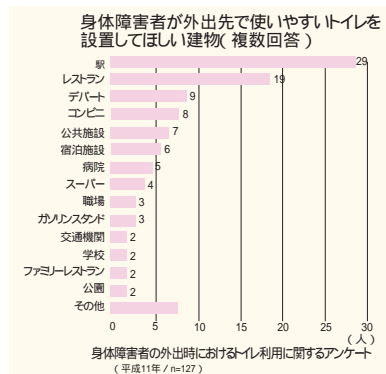
高齢者が使いやすいトイレを設置して欲しい建物は、病院、駅、スーパーなど日常生活に密着した建物で要望が多いことがわかります。



## 障害者とトイレ

身体障害者が使いやすいトイレを設置して欲しい建物は、駅、レストラン、デパートなど高齢者と同じように日常生活に身近な建物で要望が多いことがわかります。

また、トイレ設備については、オストメイト(人工肛門・人工膀胱造設者)の排泄物処理のための設備や重度の障害者の着替えのためのベッド等の設置の要望が多くなってきています。



## 乳幼児や子どもと一緒に使用するトイレ

乳幼児や子どもと一緒に外出する機会が増加していますが、

「おむつ替えや授乳場所が欲しい」

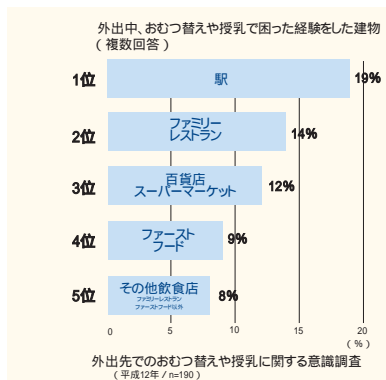
「ベビーカーを置く場所があれば便利」

「2人以上の子どもと一緒にでも安心して使えるスペースが欲しい」

「親子連れは荷物が多いので荷物を置く台が必要」

などの要望が多く寄せられています。

調査では、駅、ファミリーレストラン、デパート、スーパー、ファーストフード店などが外出先のおむつ替えや授乳で困った場所として挙げられています。



出典:バリアフリーハンドブック  
(東陶機器(株))

## 2 このガイドラインの性格

ユニバーサルデザイン( universal design )とは、年齢、性別、国籍、言語、や能力などに関係なく、だれもが利用しやすい製品、建物、環境を最初からデザインすることを意味しています。また、情報、サービスやコミュニケーションも含むすべての人が生活しやすい「社会のデザイン」といった広い概念として使われています。

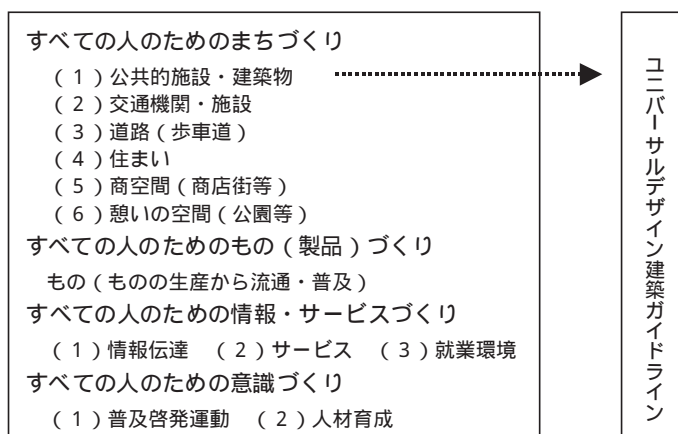
建物におけるUDでは、建物全体をだれもが普通に利用できること、使い方の自由度が高いこと、設備機器等の使い方が簡単ですぐわかること、必要な情報がすぐ理解できること、うっかりミスや危険につながらないデザインであること、無理な姿勢をとることなく、少ない力で楽に使用できること、アクセスしやすいスペースと大きさを確保することなどが求められます。

このガイドラインは、平成14年2月に作成した「くまもとユニバーサルデザイン振興指針」を受け、公共施設をはじめ、多数の人が利用する民間の建物について、UDによる設計の進め方、考え方、参考となる基準等を示しています。

建物づくりの計画段階から、利用者の意見を聴き、設計に活かしていくことを重視しており、公共的な建物だけではなく、民間の建物でも、また、規模の大きな建物だけではなく、日常的に利用する身近な建物の計画でも十分活かすことができます。

UDについては、今後とも更に研究が進み、利用者ニーズの変化に応じて新たな考えが示されていくものと思われます。

### くまもとユニバーサルデザイン振興指針



### 3 身近な建物のユニバーサルデザイン(UD)

UDによる配慮は、日ごろ私たちが利用する日常的な施設で求められています。特別な設備を設けることで解決するのではなく、いろいろな生活の場面を考え、建物の設計を工夫していくことから始まります。

#### (1) 扉が重くて開かない。外は雨。

建物の出入口は、外部の気候変化の影響を低減し、室内環境を一定に保つために気密性や遮水機能が求められますが、だれもがスムーズに移動できるよう配慮を行う必要があります、出入口は、自動ドアとし、雨やどりや傘がさせるように大きな庇を設けるなどの配慮が必要です。



雨天時も快適に利用できる玄関前屋外通路  
(びぶれす熊日会館内)

#### (2) 案内サインはあるけど、目的の場所がわからない。

案内サインはあるけど、見方が良くわからないといった経験はありませんか。建物内部の場所を知らせる案内サイン、場所の方向を示す誘導サインなどの情報サインは、必要な情報を順序よく整理して、伝える内容や方法を検討し、複雑な表現は避けるなどだれにでもわかりやすく工夫する必要があります。文字や絵による視覚情報サインだけでなく、音響案内や点字情報サインなども検討する必要があります。



利用目的別に色分けされた、わかりやすいサイン  
(運転免許センター)

#### (3) 車いすで喫茶店に入れたけどなんだか落ち着かない

にぎわいのあるオープンカフェで過ごす時間は、楽しいものです。バリアフリーが進み、車いすでの利用が可能なお店が増えてきましたが、指定された場所や特別な設備でしか利用できない場合、周囲が気になり、楽しい時間を過ごすことができないことが考えられます。

建物のバリアフリー化だけではなく、みんなが気持ちよく利用するための配慮も必要となります。



使い方の自由度が高いオープンカフェ(びぶれす熊日会館内)



#### ( 4 ) 右手に赤ちゃん、左手に荷物。トイレはどうしよう

まち中には、乳幼児や小さい子どもと一緒にのお父さんやお母さんもいます。右手に赤ちゃん、左手に大きな荷物、トイレはどうしようと困った経験はありませんか。洗面所では、バックを小脇に手を洗う光景を目にしますが、棚があれば、気持ちよく使うことができます。



洗面所に設けられたベビーシート(パレア)

#### ( 5 ) ミルクをあげたり、おむつを替えたいけど

乳幼児と一緒に行動するとき必要なのが授乳やおむつ替えができる部屋です。多くの人が利用する建物では、安心して利用できる授乳室の設置が求められています。

授乳室は、男性が利用することも考えて、母乳を与える母親のプライバシーへの配慮が必要になります。



授乳室の奥に設けられた個室(鶴屋百貨店東館)

#### ( 6 ) 疲れたときにゆっくりできる空間を

楽しいショッピングも長時間になると疲れてきます。「疲れ」を感じると買い物の意欲も失われてきます。楽しい時間を過ごすには、座りたいと思ったときに、ゆっくりできる休憩スペースがあれば、楽しいショッピングを続けることができるものです。



休憩したくなるスペースの確保(びふれす熊日会館)

## 4 ユニバーサルデザイン(UD)の基本的な考え方

### (1) サインに頼らない計画を

体系的に整備された情報提供設備などによる優れたサイン計画はUDの観点から極めて重要な要素となります。

しかし、サインがなくても自然とわかる空間づくりができていることが望ましい建物であるといえます。

建物の用途が複合化し、複雑になるほどサインに頼る度合いは大きくなりますが、初めからアクセスしやすいアプローチを考え、わかりやすいゾーニング<sup>1</sup>や動線計画を行うことで、できるだけサインに頼らない計画が可能となります。



内部空間が一目でわかる建物構成  
(国際障害者交流センター(ビッグアイ))

### (2) みんなが同じ動線で

UDでは、だれもが同じように利用できることが重要なため、障害のある人とない人の動線を違えたり、障害のある人のために特別な設備を設けたりするのではなく、自然な行動の中でできる限り多くの人が使いやすい計画にすることが必要です。

また、緊急時にしか利用しないような階段も普段の動線からわかりやすい位置に設けておくことが防災計画上に極めて重要なことです。



みんなが同じ動線となるアプローチ(運転免許センター)

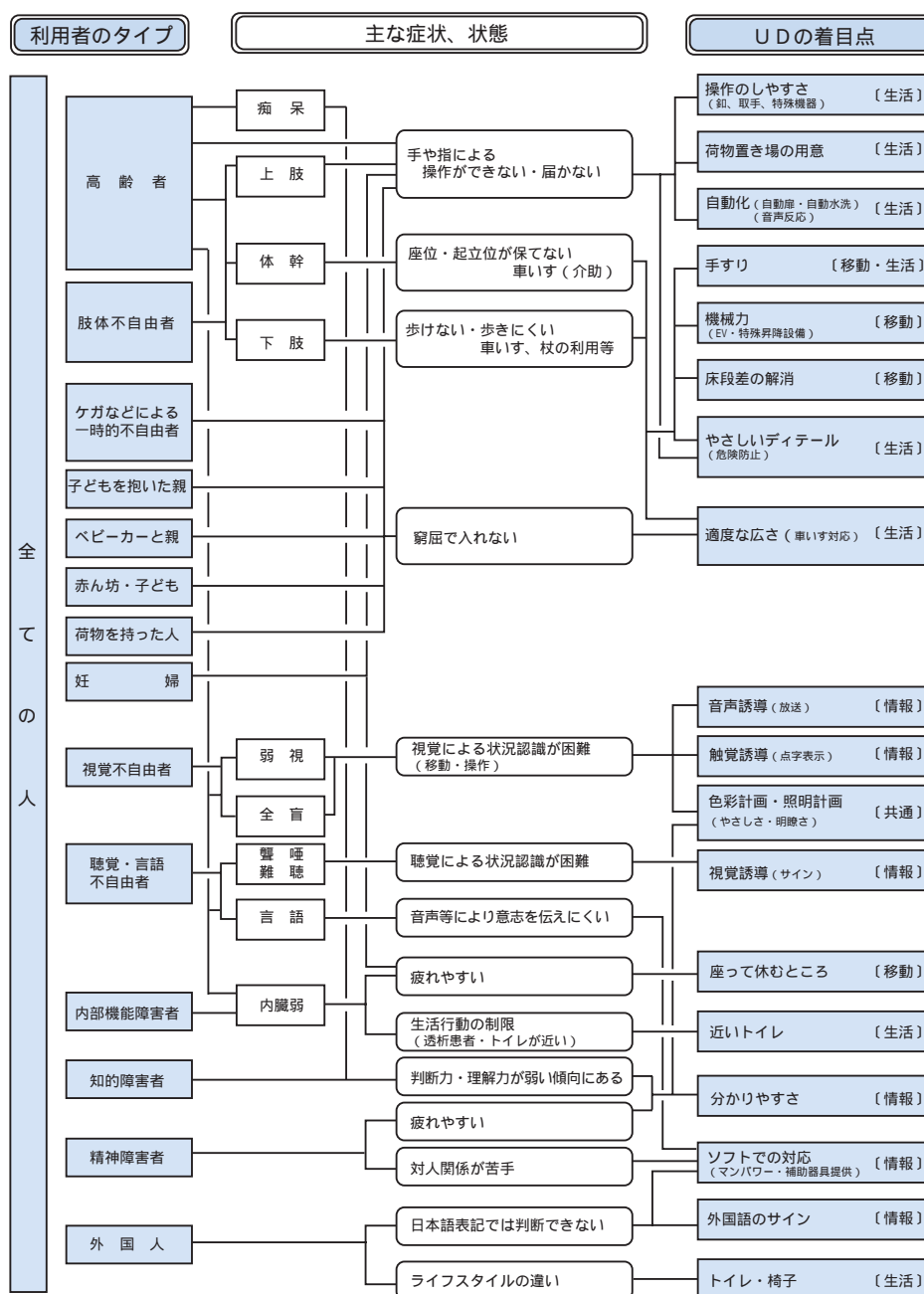
1 ゾーニングとは、建物の利用のされ方や目的などに応じて、あるまとまりごとに空間領域を分けることです。

### (3) 人の動作を考える

利用者別の行動特性と設計上配慮すべき事項については、下表のように考えられ、UDによる企画、設計等の基本となります。具体的な設計に際しては、デザインを工夫して1つの形

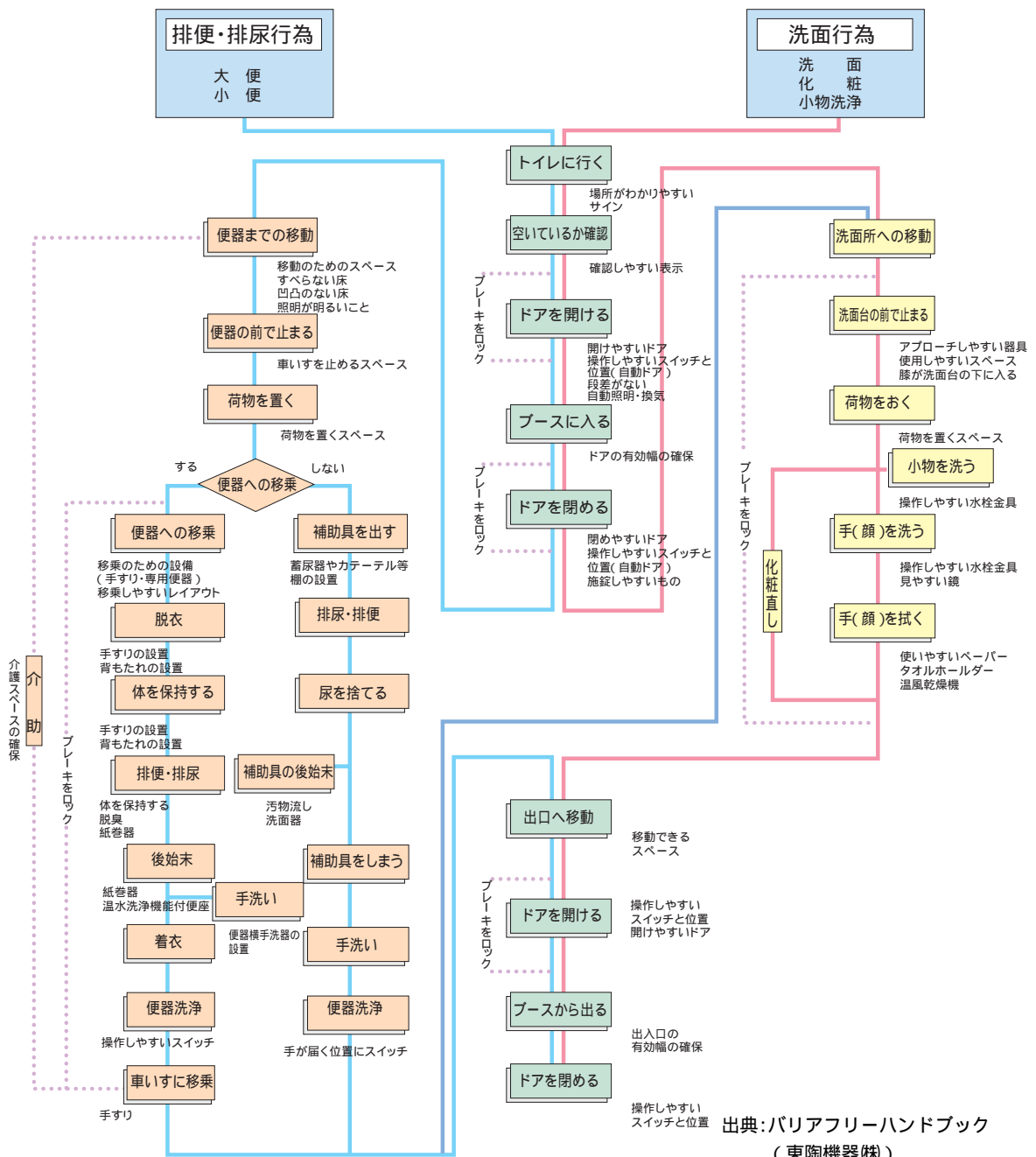
状で対応したり、利用者に応じて容易に形状が可変できるものとしたり、あるいは選択可能な複数の形状のものを用意する等、いろいろな面からの検討が必要です。

利用者のタイプと配慮事項



また、車いす使用者のトイレ内での行為から設計上の課題を整理すると下表のようになり、車いす使用者でない人でも使いやすい設備等につながります。

車いす使用者のトイレ内の行為と配慮事項





## (4) 安全で快適に

### 防災避難

高齢社会やノーマライゼーションの進展などで、建物を利用する人の平均像が大きく変わり、緊急時の情報の認知能力、判断能力、行動能力を改めて考える必要があります。

つまり、すべる、はさまる、転倒するといった危険性を排除することはもとより、だれにでもわかりやすい誘導案内方法の採用、車いす使用者や足腰の弱った人が安全に避難するための一時的に待機できるスペースの確保など、より安全性の高い避難計画を立て、設計に取り入れることが大切となってきます。



車いす使用者の避難経路に  
バルコニーを活用した例  
(ビッグアイ)

### 健康的な生活を営む

UDによる建物づくりでは利用のしやすさや使い勝手にとらわれがちですが、気候や自然環境との調和や利用も大切です。夏の日差しを遮るための軒やひさしを設けることや通風や換気を考えた開口部等を設けることは「夏涼しく、冬暖かい」建物づくりの基本であるとともに、省資源、省エネルギーのうえからも大切なことです。

また水の再利用や雨水利用など水資源の有効利用、緑地の保全、植栽による緑化など自然環境への配慮も大切なことです。

さらに、木材の利用など自然素材の利用により、健康的で安らぎを与える生活空間をつくることも重要なことです。

(屋上緑化の状況)



屋上緑化と木材の多用等により環境に  
配慮したトイレ(草千里公衆トイレ)  
写真家:宮井政次

### コミュニティとアメニティ

市街地においては、特にアメニティの創出やコミュニティの形成に配慮することが大切です。道路空間と一体となった緑地や小公園(ポケットパーク)を設け、少しの間、だれもが憩え、人々と交流できる空間を創出していくような配慮が必要です。

また「くまもとカラーガイド」等を活用し、周辺環境と建物との調和を図ることも必要です。



敷地内に公開空地を設けた例(九州電力熊本支店)